

雪災記念碑

1918年1月9日午後11時30分頃、三俣（みつまた）は日本の近代史上最大規模の雪崩に見舞われた。この大災害により、家屋28戸が倒壊、158名が死亡。犠牲者の中には地元の水力発電所建設に携わっていた労働者たちも含まれていた。この当時、三俣は101戸にわずか609名が暮らす村だった。

雪崩の原因は、この記念碑の向かい側にある山の斜面の木々が少なかったためだと考えられている。この年の冬は特に寒さが厳しかったため、薪用にその一帯の木々がすべて切り倒されてしまっていたのである。1月2日から始まった猛吹雪で、村には1週間のうちに300センチメートルを超える雪が一気に積もった。これはひと冬に通常積もる量の2倍または3倍にもものぼる量である。この大雪によって引き起こされた雪崩は、深さ約6メートル、幅約200メートルにもなり、この記念碑のある場所から池田家（いけだや）の南までの一帯を覆いつくした。山の麓に建っていた小学校が雪崩の衝撃をまともに受けたため、由緒ある宿舎であった池田家は被害を受けずにすんだ。

村には2000名を超える人たちが救助に集まり、3日間不眠不休で生存者の捜索にあたった。その甲斐あって、22名の命が救われた。この記念碑は、その雪崩の犠牲者を追悼するために1919年5月に建立されたものである。